

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00921

研究課題名（和文）近代アメリカ史の新史料から見る大西洋史

研究課題名（英文）Atlantic History from New Historical Documents in Modern American History

研究代表者

和田 光弘（Wada, Mitsuhiro）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10220964

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、前回までのプロジェクトの成果を引き継ぎ、新史料に基づいてアメリカ史における最新のアプローチたる大西洋史の有用性を実証するとともに、かかる共同研究を通じて、東海地区の主要国公立大学3校のアメリカ史研究者間のネットワークを構築しようとするものである。本研究では大西洋史の理論的彫琢を深めるため、大西洋史研究の泰斗M・レディカー教授と連絡を密にするとともに、研究代表者・研究分担者がそれぞれ担当するテーマのもと、当該アプローチを援用しつつ、独自に米国の市井より入手して私蔵している未刊行手稿史料のオリジナル等を中心とする一次史料の読み込みと分析をおこない、大西洋史の実証的な深化を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、アメリカの市井に眠っている新たな史料、すなわち文書館等に収められていない新史料を「発掘」、入手、翻刻、紹介し、当該史料等をアメリカ史における新たなアプローチたる大西洋史の視点を加えて分析することで、外国人研究者としての可能性の範囲を広げ得たと考える。その際、東海地区3大学の初期アメリカ史研究者がともに課題に挑むことで、文献収集の効率化なども含めて連携を進めた。さらに大西洋史研究の第一人者M・レディカー教授の理論的導きのもと、大西洋史研究の成果を様々な形で広く社会に還元し、当該アプローチの有効性について広く啓蒙に努めた。

研究成果の概要（英文）：In this joint research project, the project members aimed to broaden the perspective of Atlantic history, the latest popular approach in the field of early American history while establishing the research network of early Americanists among three national and prefectural universities in the Tokai region. Under the general guidance by the most prominent Atlantic historian, Prof. Marcus Rediker (Distinguished Professor at the University of Pittsburgh), each member pursued his or her own research project, examined and analyzed unpublished manuscripts, some of which are newly found documents and privately owned by members. In the process above, we tried to substantiate the validity of the Atlantic historical approach.

研究分野：アメリカ史

キーワード：大西洋史 アトランティック・ヒストリー 新発見史料

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化が進む昨今、アメリカ史研究においても、海や国境を越えるヒト・モノ・カネ・情報等の研究が重視されるに至っている。大西洋を囲む4大陸の相互連関を考究対象とする大西洋史(アトランティック・ヒストリー)のアプローチは、まさにその動向の頂点にあり、いわゆるグローバル史との親和性も強い。本研究はこの最新の枠組みのもとに、新史料の「発掘」と分析を推進しようとする野心的な試みである。以下で述べるように、これまで大西洋史について様々な形で研究・紹介をしたり、関連の研究書・訳書を上梓したりする中で、新史料の一層の「発掘」や分析を通じて外国人研究者としてオリジナルな貢献が可能となるのではないかと、さらにその際、東海地区の初期アメリカ史研究者がともに課題に挑むことで、地域の大学間の連携が進捗し、文献等の「共同化」による所蔵文献・史料の重複の回避など、より効率的に成果を上げうるのではないかと考えたことから、本研究の立ち上げを構想した。

(2) 大西洋史の全貌は、その来歴と現状を体系的に論じたバーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』に余すところなく開陳されており、同書の邦訳は、研究代表者の和田が中心となって2007年に名古屋大学出版会から上梓した。すでに故人ではあるが、令名高いアメリカ史家、ハーヴァード大学名誉教授のベイリンは大西洋史国際セミナーを主催し、大西洋史の推進に精力的に携わってきた。一方、大西洋史のアプローチについては、その内容に即して様々な分類がなされており、とりわけマーカス・レディカー(ピッツバーグ大学卓越教授)による分類は重要なものといえる。しかしながら発展途上にある大西洋史の方法論やカバーする時代・空間についてはさらなる理論的彫琢・検討が必要であり、本研究計画においてレディカー氏と連絡を密にして研究の推進を考えたのも、そのためである。氏は、これまでの歴史学が当然のごとく「陸」を対象としていたのに対して、「海」の視点からとらえるという方法論的刷新を試みており、まさにコペルニクス的転回といえる。具体的に言えば、氏が主に考究対象とする船乗りや海賊など、これまでのナショナル・ヒストリーの枠に納まりきらなかった周縁的存在は、国境を楽々と越える大西洋史における中心的なテーマであり、その具体相は、氏の著書『海賊たちの黄金時代 アトランティック・ヒストリーの世界』(和田他訳、ミネルヴァ書房、2014年)に如実に示されている。本プロジェクトでは氏の理論的導きのもと、様々な新史料の分析を進めるとともに、一層広く大西洋史のアプローチをわが国に紹介することを構想している。

(3) 和田はすでに上述の翻訳のほか、一般向けの書物として、和田『植民地から建国へ 19世紀初頭まで(シリーズ アメリカ合衆国史)』(岩波新書、2019年4月、第4刷・第2回増刷、2022年12月)を上梓し、同書を通じて積極的に大西洋史のアプローチの有効性を喧伝するとともに、和田編著『大学で学ぶアメリカ史』(2014年4月、第11刷、2023年12月)や紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』(山川出版社、2009年)の担当章、また幾つかのシンポジウムにおいても大西洋史の体系的な紹介をおこなっており、さらに近世大西洋世界の諸相について種々の新史料から明らかにした単著を上梓している(和田『記録と記憶のアメリカ—モノが語る近世』名古屋大学出版会、2016年)。また、科研のプロジェクトとしても、平成19~21年度、平成27~29年度、平成30~令和2年度(いずれも和田を代表者とした基盤研究C)において、和田・森脇・久田らの研究グループが大西洋史の枠組みを援用しつつ研究を鋭意進めており(とりわけ後者2つの科研)、上述した研究成果の内容の一部は、当該研究に基づく研究成果といえる。本プロジェクトはこれらの研究成果の蓄積を受けて、焦点を一層、新史料の分析に絞ってオリジナルな成果を生み出そうとするものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究における新史料の定義とは、市井から入手した、アーキヴィストの手を経ない「うぶな」史料(文書館等に収蔵されていない史料)、すでに文書館等に収蔵されているが、これまで注目されていなかった、もしくは大西洋史的な視角では分析されてこなかった史料、を主として意味する。以下では、研究代表者(和田)の研究方法を具体的に記すことで、本研究課題の核心をなす学術的「問い」の具体相を提示したい。和田が研究の俎上に載せるのは、建国期のマサチューセッツで活躍したジョン・モルトン船長、および18世紀末にマサチューセッツ州イプスウィッチで死去した地方名士ジョン・チョートである。いずれの史料も米国の信頼できるディーラーから和田が入手し(入手に際して科研費は使用していない)、個人的に所蔵しているものである。まず、J・モルトン船長の史料について紹介するならば、彼はマサチューセッツ州のニューベリーポートやウェナム等を拠点として、ニューヨークや南部のノーフォーク(ヴァージニア州)、チャールストン(サウスカロライナ州)、ニューオリンズ(ルイジアナ州)、またカリブ海域、西インド諸島のキングストン(ジャマイカ)、ハバナ(キューバ)、さらには大西洋を越えてイギリスのリヴァプールやブリストル、ドイツのハンブルクやブレーメン等にまで交易の裾野を広げていた人物で、18世紀末のフランスとの「擬似戦争」では船を失う経験も、「無名」でありながらも、近代大西洋世界の強固な紐帯、ネットワークを自ら体現した存在といえる。和田が本研究で扱う新史料は、このモルトン船長に関わる一連の一紙(単葉)文書群であり、その内、48点のオリジナルを和田が個人的に所有している。いずれもニューハンブシャー州の

とある旧家から発見されたもので、複数回にわたって入手した(入手にあたっては、当然ながら代表者個人が費用を負担しており、科研費等は使用していない)。むろん当該の文書群のすべてを手にできたわけではなく、少なくともさらに 12 点の存在が確認できるものの、他の個人所有となっている。これらの他にも十数点(ないし数十点)以上の文書が現存すると想定されるが(その一部は 現在、確認できる)本研究では和田が所蔵する 48 点を中心に、他の個人所有の 12 点の情報も加えた 60 点の文書群を史料集合とし、ジョン・モールトン船長関連文書と仮称したい。内容としては領収証、請求書、約束手形、為替手形、船員船客健康証明書など、同船長の活発な経済活動を反映したいわゆるエフェメラの類が多く、さらに興味深い手紙(妻への手紙、妻からの手紙)も 7 点含まれる(さらに草稿 1 点も所蔵)。前述したようにモールトン船長はいわゆる「有名な」人物などではなく、地域である程度名を知られていたとはいえ、市井の無名の一個人に過ぎない。したがって本新史料も文書館等、公的な機関の所蔵とならず(さらにのちの時代の一族の文書で、セイラムのピーボディエセックス博物館に収蔵されているものもある)それゆえ今回「発掘」されたこれら「うぶな」史料は、直截な形でこの市井の個人の声をわれわれに伝えてくれる。とりわけ妻との書簡は、近年盛んな「感情史」の手法を用いて分析を施すと、非常に興味深い結果が析出される。また、18 世紀末にマサチューセッツ州イプスウィッチで死去した地方名士 J・チョートの遺産競売に関する新史料も和田が私蔵しており、当該史料は相続の際の検認手続きのために必要な、いわゆる遺産財団に属する家財の処分等に関して克明に記した報告書(会計簿)で、これも文書館等に収められたことのないオリジナルの史料である。この史料の分析を通じて、「シス大西洋史」(大西洋史の下位分類で、大西洋の文脈の中で特定の地域の史実を探求するアプローチ)の一端を明らかにするとともに、同氏を取り巻く地理的環境の復元や、当時の同種の文書に適用できる一般的な「法則」も見いだせる。これら種々の新事実を明らかにし、「シス大西洋史」につながる道筋を示しうると考える。本来このような個人史こそ、社会史が扱うべき対象に他ならず、その研究に際しては、必ずしもアメリカのアーキヴィストの手を経た史料を用いる必要はない。むしろそうでないからこそ、生の「歴史の場」に踏み込むことができるともいえよう。むろんあくまでも限られた範囲内ではあるが、これまでも和田はかかる新史料(文書館等に収められていない、新たに「発見」された史料)の入手・翻刻・紹介の試みを積極的に実践してきており(アメリカの植民地時代・独立革命期の領収証・約束手形・為替手形・支払指図書・小切手・差押え令状・軍票等)たとえば、その成果の一端は、科研費(研究成果公開促進費)を得て単著として公にしている(和田『記録と記憶のアメリカ モノが語る近世』名古屋大学出版会、2016 年)。かかる営みを継続してゆくことで、外国人研究者としての可能性の範囲を広げたいと考えている。

(2) そもそも文献史料の場合、新たな知見を得ようとすれば、情報の「川」を遡って「源流」へと至る必要があるが、周知のとおり、その源流には文書館や図書館、博物館などが存在し、貴重なコレクションとして多くの文書を収蔵している。古代・中世の文書、そして近世でも 17 世紀頃までの文書に関しては、源流に厳然と位置するのは文書館・図書館等であり、たとえ個人のコレクションが散見されるとしても、存在自体が知られていない文書を新たに探し出すのは

むろん新たに発見・発掘される文書もあろうが、きわめて困難といえよう。しかし 18 世紀、特にその後半以降の文書に関していえば、文書館・図書館を越えて、さらに「川上」に遡ることができる。すなわち市井に埋もれている種々の文書を探し出すことができるのであり、そのなかに本研究で扱う新史料も含まれている。むろんこの時期の文書であっても、政治史・制度史関連の重要なものについては、当然ながら文書館・図書館をその居としている場合がほとんどと言ってよからう。しかし、とりわけ社会史・経済史関連の文書の場合、家系に代々伝えられているものなど、いまだ「発掘」の余地は大きい。本研究は、その「発掘」の成果に基づく独創的な試みと言える。また、大西洋史の枠組みを全面的に援用したアメリカ史研究は、前述のように最先端の研究手法であり、かかるアプローチの有効性が実証されることで、諸要素の有機的連関を前提とする同様の研究を誘発する効果があるといえる。とりわけ本研究では、これまで使われることのなかった類の史料、なかんずく和田と森脇の研究においては、これまで文書館に収められることのなかった新史料を用いて研究を進めるため、新たな知見や史実が得られるものと期待される。そしてそれらの知見が大西洋史の視座から解釈されることで、より広い時間的・空間的な軸のなかで当該史実を位置付けることが可能になると考えられる。また、論文や著書による学術的な考究結果の公開に加えて、和田は、他の訳者とともに前述のレディカー教授の著書を邦訳するなどしており、わが国の学界のみならず社会一般に対しても、大西洋史の具体相や魅力を紹介してゆきたいと考えている。

3. 研究の方法

(1) 本研究では東海地区における共同研究という機動力を最大限に生かしつつ、地域・時代ともに幅広い個別事例を収集・分析し、そこから得られたさまざまな知見を総動員して大西洋史の視座の有効性を示してゆくことを目標とする。研究代表者・研究分担者は、それぞれの担当する研究課題を出発点として本研究のテーマにアプローチした。もっともプロジェクト開始当初は、引き続いてのコロナ禍により、海外での史料収集や実地調査が困難な状況で、やむをえず予定を若干変更せざるをえなくなったが、そのような中でも、インターネットの活用や、すでに手元にある史料の解析を鋭意進めるなどして、研究の進捗に影響のないように取り計らった。主要設備としては、関連史資料の収集を引き続き進めるとともに、すでに研究代表者の和田が名古屋大学

に導入している「初期アメリカ刊行物史料集成:エヴァンス・データベース(America's Historical Imprints, Series I: Evans, 1639-1800)」を一層活用する。このデータベースは、17・18世紀にアメリカで出版されたほぼ全ての刊行物を網羅し、大西洋史研究の重要な基礎資料となりうるもので、NII-JUSTICE 共同購入コンソーシアムに採択されていることも助けとなって、名古屋大学での導入を成功させたが、研究協力者の所属する愛知県立大学、三重大学にとっても貴重な史料集成といえる。上記の共同作業を通じて、東海地区の主要国公立大学3校のアメリカ史研究者間のネットワークが強固となり、関連文献等も重複なく充実させることが可能となった。

(2) 令和3年度は、研究代表者の和田光弘は、J・モルトン船長の史料を引き続き読み込みつつ、「シス大西洋史」の一端を明かにすべく、18世紀末マサチューセッツ州の地方名士J・チョートの遺産競売に関する史料の分析を試みる。また、上智大学アメリカ・カナダ研究所主催の合評会において、刊行した著書について報告をおこなうとともに、日本アメリカ史学会・第18回年次大会では、シンポジウムのコメンテーターを務める。さらに、ちくま学芸文庫から拙訳の文庫版を上梓する。研究分担者の森脇由美子は、引き続き、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの有力者ゼブロン・ダグラスの邸宅に残された未刊行史料「オネイダ湖運河文書」の分析をおこなうとともに、同運河およびダグラスについて、ニューヨーク州議会などの公文書などから探る。研究分担者の久田由佳子は、捕鯨業に従事する男性とその妻たちの手紙などを通じて、陸に残された女性たちの生活を明らかにしながら、大西洋史に女性史の視点を積極的に取り入れつつ、マサチューセッツの捕鯨基地の経済的変容、大西洋経済における位置づけなどについて考究する。また、日本アメリカ史学会第51回例会のコメンテーターとして、北東部の女性史・労働史研究者の立場から、コメントをおこなう。

(3) 令和4年度は、研究代表者の和田は、大西洋史の諸相や史料の利用に関する諸問題を総合的に考察するとともに、個別の適用例として、マサチューセッツ州イプスウィッチの地方名士ジョン・チョートのオリジナル文書(和田所蔵)の分析に引き続き邁進し、大西洋史の下位分類たる「シス大西洋史」の具体相を明らかにする。とりわけ今年度は、回帰分析などの計量分析を多用して、史料生成の背景に迫る。また、初期アメリカ学会が総力を結集して編んだ学術論文集に、J・モルトン船長関連の新史料の分析などに関する論文を掲載する。学会報告では、歴史科学協議会・第56回大会予備報告、さらに歴史科学協議会・第56回大会報告で研究成果を報告する。研究分担者の森脇由美子は、引き続き、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの有力者ゼブロン・ダグラスの邸宅に残された未刊行史料「オネイダ湖運河文書」の分析をおこなうとともに、同運河およびダグラスについて、ニューヨーク州議会などの公文書などから探る。研究分担者の久田由佳子は、家政学の祖として知られるキャサリン・ピーチャーの著作の分析の他、料理用ストーブの発明や衛生観念の変化などのマテリアル・カルチャーの研究、さらに女性史、家族史、労働史などの既存の研究を踏まえながら、19世紀前半の家事労働が工業化の影響を受けてどのように変化したのか、明らかにする。研究代表者・分担者ともに、研究の成果を論文・報告にまとめて広く学界に問う年度となる。

(5) 令和5年度は、研究代表者の和田は、大西洋史の諸相や史料の利用に関する諸問題を総合的に考察するとともに、マサチューセッツ州イプスウィッチの地方名士ジョン・チョートのオリジナル文書(和田所蔵)の分析に引き続き邁進し、大西洋史の下位分類たる「シス大西洋史」の具体相を明らかにする。さらに今年度は、18世紀初頭マサチューセッツ湾植民地における遺言検認裁判に関する新発見の一葉史料をアメリカのディーラーから独自に入手して翻刻し、遺言が存在する場合の財産目録の生成プロセスを解明する。研究分担者の森脇は、三重大学の副学長として、膨大な職務に忙殺されながらも、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの個人宅から発見された未刊行史料のオリジナル(森脇所蔵)の分析を引き続きおこなう。研究分担者の久田は、ピーボディエセックス博物館の諸史料の調査をおこない、捕鯨基地としてのマサチューセッツの経済的変容、大西洋経済における位置づけなどについて鋭意考究する。さらに、マーカス・レディカー氏の講演の翻訳を上梓するとともに、来年度に向けてアメリカ学会英文ジャーナルの論文を準備し、さらにニューオリンズで開催されるアメリカ歴史学会での報告準備をおこなう。来年度は最終年度であるため、研究代表者・分担者ともに、上記のごとく研究の成果を論文にまとめるなどして、広く学界に問いたい。

4. 研究成果

(1) 研究代表者と分担者はそれぞれ担当するテーマのもと、独自に米国の市井より入手して私蔵している未刊行手稿史料のオリジナル等を中心とする新史料の読み込みと分析をおこない、大西洋史の実証的な深化を試みた。本研究では東海地区における共同研究という機動力を最大限に生かしつつ、幅広い個別事例を分析し、大西洋史の視座の有効性を示すことを目標としており、研究代表者・分担者は、それぞれの担当する研究課題からアプローチして、最終年度においては、総まとめや社会への還元を目指した。

(2) 研究代表者の和田は、令和3年度は、引き続きJ・モルトン船長関連の史料を読み込むとともに、18世紀末にマサチューセッツ州イプスウィッチで死去した地方名士J・チョートの遺産競売に関する史料(和田私蔵)の分析を試み、論文草稿を準備した。また前述のように、上智大学アメリカ・カナダ研究所主催の合評会(「岩波新書 シリーズ アメリカ合衆国史 合評会・第1回」)において、著者として報告をおこなうとともに、日本アメリカ史学会・第18回年次大会では、シンポジウム「白人至上主義をめぐる歴史と歴史認識」のコメンテーターを務め、さ

らに、ちくま学芸文庫から拙訳の文庫版を上梓し（S・ミンツ著、川北稔・和田光弘訳『甘さと権力』）関連の研究成果を広く世に知らしめた。和田は令和4年度、J・チョートの史料分析の成果の一端を、論文として公刊したほか、J・モルトン船長関連の新史料の分析成果について、初期アメリカ学会の学術論文集に論文を掲載した。さらに『歴史評論』の第56回大会準備号に文章を寄せた。また、かつて和田が著した著書『タバコが語る世界史』（山川出版社）が第7刷（1,500部）（2023年1月）、『植民地から建国へ』（岩波新書）が第4刷・第2回増刷（1,500部）され（2022年12月）後者の著書は、少なくとも当該年度は3冊の書籍、1本の論文でも言及された。また学会報告では、歴史科学協議会・第56回大会予備報告、そして歴史科学協議会・第56回大会報告で研究成果を報告するなど、広く情報を発信した。一方、次年度に名古屋大学を会場として開催される第73回日本西洋史学会大会の大会準備委員会委員長として準備にいそしんだ。和田は令和5年度、「シス大西洋史」の事例として地方名士J・チョートの遺産競売に関する史料の分析を引き続き試み、とりわけ今年度は、生産財・消費財別、一族別の分析をおこなった。また18世紀初頭マサチューセッツ湾植民地における遺言検認裁判に関する新発見の一葉史料をアメリカのディーラーから独自に入手して翻刻し、遺言が存在する場合の財産目録の生成プロセスを解明した。さらに『歴史評論』（878号）に論文を寄稿した。また依頼されて早稲田大学エクステンションセンターで全5回の遠隔講義（2024年1月～3月）をおこなうとともに、放送大学の講義（渡辺靖「現代アメリカの政治と社会」第1回）にもゲスト出演するなどした（2023年6月収録）。さらにプロジェクトメンバー3名も執筆したアメリカ史のテキスト、和田編著『大学で学ぶアメリカ史』（ミネルヴァ書房）の第11刷が出版され（2023年12月）総計でおよそ17,000部程度となった。また和田は第73回日本西洋史学会大会に際し、大会準備委員会委員長（於・名古屋大学、2023年5月）として全力をそそいだ。このように学界や社会への情報発信を積極的におこなった。

（3）研究分担者の森脇は、ニューヨーク州サリヴァンの個人宅から発見された未刊行史料「オネイダ湖運河文書」のオリジナル（森脇所蔵）を分析の俎上に載せて、同史料の読み込みを進めた。これらの史料は、エリー運河の支線オネイダ湖運河に関する82点からなり、サリヴァンの有力者ゼブロン・ダグラスが州議会における証言のためにまとめ、保管していたと考えられ、大西洋の彼方の市場へのアクセスがいかんにして可能となったのか、「シス大西洋史」の実践例といえる。森脇のこのような地道な史料分析は、わが国のアメリカ史研究の泰斗からも賞賛の言葉を頂いている。さらに同運河およびダグラスについて、ニューヨーク州議会などの公文書などからも探り、「オネイダ湖運河文書」を広いパースペクティブからの位置づける作業をおこなった。

（4）研究分担者の久田は、大西洋史に女性史の視点を取り入れるべく、ピーボディエセックス博物館の史料（乗組員の手紙、結婚証明書、保険証券等）の読み込みを通じて、マサチューセッツの捕鯨基地の大西洋経済における位置づけなどについて考究を進めた。また日本アメリカ史学会第51回例会「アンテペラム南部史研究の新解釈」のコメンテーターとして、女性史・労働史研究者の立場からコメントをした。さらに、東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会の編集委員として論文を寄せるとともに、大学生向けのテキストにおいて「歴史の扉」を担当する一方、田中きく代他編著『海のグローバル・サーキュレーション』において、われわれの大西洋史研究プロジェクトの大いなる理解者であるマークス・レディカー氏の講演の翻訳を担当した。また久田は、アメリカ学会英文ジャーナルの論文を準備するとともに、2024年4月にニューオリンズで開催されるアメリカ歴史学会での報告準備をおこなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 和田光弘	4. 巻 第6号
2. 論文標題 「建国期マサチューセッツの地方名士ジョン・チョートに関する新史料についての一考察（その2）」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『名古屋大学人文学研究論集』	6. 最初と最後の頁 275-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 和田光弘	4. 巻 871号
2. 論文標題 「アメリカ南部における戦争の記憶と記念碑 アメリカ独立戦争を中心に」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『歴史評論（第56回大会準備号）』	6. 最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 和田光弘
2. 発表標題 「アメリカ南部における戦争の記憶と記念碑 アメリカ独立戦争を中心に」
3. 学会等名 歴史科学協議会・第56回大会予備報告（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和田光弘
2. 発表標題 「アメリカ南部における戦争の記憶と記念碑 アメリカ独立戦争を中心に」
3. 学会等名 史科学協議会・第56回大会報告（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和田光弘
2. 発表標題 「岩波新書 シリーズ アメリカ合衆国史 合評会・第1回」(著者報告)
3. 学会等名 上智大学アメリカ・カナダ研究所主催合評会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田光弘
2. 発表標題 シンポジウム「白人至上主義をめぐる歴史と歴史認識」(コメンテーター)
3. 学会等名 日本アメリカ史学会・第18回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久田由佳子
2. 発表標題 シンポジウム「アンテベラム南部史研究の新解釈」(コメンテーター)
3. 学会等名 日本アメリカ史学会・第51回例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 和田光弘	4. 発行年 2023年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 302
3. 書名 佐久間みかよ他編『改革が作ったアメリカ 初期アメリカ研究の展開』(「第8章 大西洋世界のなかのアメリカ建国期 ジョン・モルトン船長関連新史料の一考察」)	

1. 著者名 久田由佳子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 346
3. 書名 東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会編『ジェンダー研究が拓く知の地平』（「アメリカ北東部における初期工業化の影響と家事労働の再編をめぐって」）	

1. 著者名 久田由佳子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 390
3. 書名 遠藤泰生・小田悠生編著『はじめて学ぶアメリカの歴史と文化』（「歴史の扉5 北東部の工業化と女工たちの世界」）	

1. 著者名 久田由佳子（翻訳）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 426
3. 書名 田中きく代他編著『海のグローバル・サーキュレーション』（マーカス・レディカー（翻訳 久田由佳子）「アメリカにおける奴隷制即時廃止論の驚異的起源」）	

1. 著者名 シドニー・W・ミンツ著（川北稔・和田光弘訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房（ちくま学芸文庫）	5. 総ページ数 527
3. 書名 『甘さと権力 砂糖が語る近代史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	森脇 由美子 (Moriwaki Yumiko) (10314105)	三重大学・人文学部・教授 (14101)	
研究 分 担 者	久田 由佳子 (Hisada Yukako) (40300131)	愛知県立大学・外国語学部・教授 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関